



第27回才能教育全国大会コンサート

3000人の児童による (バイオリン・ピアノ
セロ・フルート・箏) 大合奏

と き——昭和56年3月26日(休)P.M. 2:00

と ころ——日本武道館大ホール(東京・九段)

入 場 料——指定席 ¥1,000

'81 TALENT EDUCATION NATIONAL CONCERT

violin · piano · cello · flute · koto by 3000children

MARCH 26(Thu) 1981 P.M.2:00

NIPPON BUDO-KAN TOKYO



'81

TALENT
EDUCATION
NATIONAL
CONCERT

第27回才能教育全国大会委員

- 大会委員長……………本多 正明
- 大会副委員長……………田中 金重
- 大会企画委員長……………広瀬 八朗
- 関東地区支部長会幹事長……………藍川 安隆
- 東京事務所……………水野 明夫

●企画委員

(指導者)

大熊 庸生	安田 広務	青木 博幸
足立佳代子	石川 裕子	印田 礼二
大坂 和彦	小幡 良平	金沢 裕久
小林 庸男	佐藤 勝夫	渋谷 重良
津田 吉男	富川 歆	七海浩一郎
原 まり子	深沢 菌子	牧野 郁子
三樹 正	村上 豊	山本 真嗣

(支部長)

中川 匠	山本 和人	平岩 恵子
新井 雄市	山内 一郎	羽賀 義恵
大西 裕之	赤津 百子	亀井美栄子

●ピアノ伴奏

秋葉三佐子	印田 倫子	建部 紀子
黒川美方子		

●アナウンサー

山内 静子 鶴岡佐代子

●賛助出演〔箏〕……………正派邦楽会

総裁・家元・中島 靖子

●主催

社団法人 才能教育研究会

◆本部

〒390 長野県松本市深志3-10-3

☎0263(32)7171

◆東京事務所

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9

主婦の友文化センタービル2F ☎03(295)0270

◆東海事務所

〒464 名古屋市千種区春岡通4-15 大沢美良方

☎052(751)3436



●大会委員長

本多正明

Chairman of National Concert

Masaaki Honda

全国大会も今年で27回目、立派な大人になりました。第1回大会以来、この大会を企画し、参加し、責任を受けもってきた私にとり、やはり感慨、まことに深いものがあります。

才能は生まれつきのものでなく、環境で育つことを世界に実証しているのが、この大会の意義であります。この27年間、外国から全国大会に出席された方の数も少なくありません。そしてこの方々からは異口同音に、これは世界の奇蹟であると絶賛をおくられています。3千人近い児童が、大会当日各地から参加され、見事な演奏をするのを見聞するとき、誰方も、深い感動にとらわれると思います。そして、その背景に何があるかと、考えずにいられません。

私達は、もっと多くの人々が、この事実をみてそして考えていただきたいと切に思っております。又時として、日本中の子供がこのおつかしい日本語をすらすらしゃべることを当然と受け止めている心理が、見事な演奏をきいても、当り前と受け取り、何の感動もおこさないのではないかと気がかゝることがあります。

今年は国際障害者の年であります。私はこの数年、脳障害児の治療に力を注いでいますが、結局障害児も正常児も紙一重という気がします。

そして障害児がよくなるとしたら、正常児はもっともつとよくなるなければならない番です。

今年は、PR専門の方々とキラキラ星運動をおこし、大いに世界に「どの子ども育つ」というスローガンを訴えたいと思います。

7月末、マサチューセッツ大学で開催される、才能教育の世界大会でもこのことを訴えたいと思います。又、8月21日から西武デパートで世界障害児の絵画、造形展を開催いたしますので是非見て下さるようお願いいたします。

●Celebrating the 27th National Concert

In its 27th year the National Concert of The Talent Education Institute has grown fullfledged. I cannot but feel a deep sense of satisfaction and reward after being involved in organizing this concert since its inception.

The purpose of this concert is to demonstrate that talent is not inborn but can be made to develop in suitable environments. Not a few people from abroad attended this concert during the past 27 years and they all alike remarked that this was a miracle. When you see nearly 3,000 children join together in a fine performance, you must be moved at the scene and be led to think about something behind it.

It is our sincere hope that more and more people will

see their performance and stop to think about it. I am afraid that people may tend to take this musical performance too much for granted to bring any admiration as they are used to hearing Japanese children speak their difficult mother tongue with such ease.

This year is designated as the International Year for the Disabled. I myself have been involved in the treatment of brain-troubled children for several years and came to think that they are not different from normal children in any fundamental points.

Yet, inasmuch as the handicapped can develop their talent, the normal children ought to achieve even better results.

We will initiate the "Twinkle, Twinkle Little Star" Movement this year with the help of public relations experts to make known the concept "Any child can be made to grow" by people around the world.

I plan to seek on this subject at the world conference on talent education to be held at the Massachusetts Institute of Technology in July this year.

Finally, I would like to take this opportunity to advise you of the art exhibition by the disabled children of the world to be opened from August 21st at the Seibu Department Store so that many of you may visit and enjoy it.



●才能教育研究会会長

鈴木鎮一

President

Shinichi Suzuki

めでたさや どの子ども育つ道のあり(元日)

世界中の子供達が、皆自分の国の言葉を自由自在に話すとても高い能力に育つてゆくその事実は一、何を物語っているのでしょうか。

育てられて育つた能力ではないのか、何とどの子供も、育てれば高く育つその可能性をはっきりと示しているのではないのか。

一、人類は、言葉だけを上手に教えて、他のことは、生れつきだと、昔から考えていたのは何といううかつであつたのでしよう。

どの子ども育つ道はあるのです。
40数年前に私はある日このことに気がついて、0歳からの母国語の育つ教育法の研究をはじめたのでした。そして知り得たことは、

- 1 能力は生れつきではなかった。
- 2 生命の大いなる働きによって身につけてゆくのが能力である。

そして「能力の法則」を発見することが出来たのでした。そして子供はどの子供も素晴らしいことを私は40数年の育てた経験からはっきりと知りました。育てなければ何も育

たないのです。今日は、6歳以下3歳の各地の生徒さんが集まり、今日の大会にぶっつけ本番というわけで600人からの演奏をプログラムに加えてみました。世界に広がった「鈴木メソッド」は、どの子ども育つ母国語の教育法なのです。どの子ども育つすべての教育の革命運動として益々努力して参ります。

●Every child can be made to grow

Children of any country learn to speak their mother tongue fluently and achieve a high level of communication. What does this fact mean to us? Haven't they just been taught to speak that language?

The simple fact is that every child possesses a high potentiality that can be developed by education.

What a mistake we have been making in thinking that men can be taught to speak the language but their other abilities are predetermined at birth.

Indeed, every child can be made to develop his or her ability if properly educated.

I found the fact more than 50 years ago and began the study on the mother tongue system of education applicable to children from the age zero.

What I knew through the study were:

Talent is not predetermined at birth.

Talent is what a child acquires with the help of great works of his or her life.

Thus I found the "principles of talent development."

My teaching experience of over 40 years taught me that every child has a great potentiality. But nothing can be achieved without education.

In today's program you will find a concert by 600 children between the ages of 6 and 3. They came from various parts of the country and are going to perform without rehearsal.

The "Suzuki Method" has been accepted all over the world as the mother tongue system of education. It should be further promoted as a revolution in education.



●理事長

井深 大

Board of Director

Masaru Ibuka

●教育の真の姿を世界に示す

今年の全国大会は第27回もの回数を重ねることになりました。

昨年は才能教育創立三十周年記念祝賀会が松本で開かれましたが、鈴木先生がこの30年間に築き上げられた御功績は、筆には尽くせない大きなものであります。

今日、日本でやったことで最も世界に広くまた、大きな

影響を及ぼしているものは何であるかを考えてみると、この鈴木メソッドを第一に挙げなければならないでしょう。

アメリカの鈴木チルドレンが20万人以上になり、オーストラリア、英国、その他でも鈴木メソッドの火はどんどん燃え広がっています。こんなにたくさんの子供達、大人達を動かすことができるのは、鈴木メソッドの偉大さをものがたっているということができましよう。

単に音楽の世界だけでなく、教育のあり方そのものを考え直すきっかけを与えたのは、この鈴木メソッドです。

数多い鈴木チルドレンの中からは、決して非行暴行学生は発生していないでしょう。

この世の中をよくし、平和にするための幼児教育は人々が考えているよりもはるかに重要な役割を持っています。

今年は6歳以下の幼児だけの1000名近くの演奏も行われ、幼児教育の実態を改めて皆様方に強く印象づけることでしよう。

世界にたった1つしかないこの大祭典に、幸あれ。

●Let the world know what education can do

This year the National Concert of The Talent Education Institute is going to mark its 27th year, and it was last year that the Talent Education Institute celebrated its 30th anniversary of the existence in Matsumoto City, Nagano Prefecture. During these thirty years Mr. Shinichi Suzuki made unmeasurable contribution to the advancement of talent education.

The Suzuki Method should be mentioned first among things that Japanese achieved to cause deep and worldwide implications.

Suzuki Children in the U.S. now exceed 200,000 and they are rapidly increasing in other countries like the United Kingdom and Austraria. The fact that so many parents and children around the world are fascinated by the method is an eloquent illustration of its value.

Now the Suzuki Method has given us a chance to reconsider not only music but also education. You will never find juvenile delinquency among Suzuki Children. The infant education plays a far more important role to make a better and peaceful world than we imagine.

Nearly one thousand children under the age of six are scheduled to perform before you at this year's concert, where you will realize what the infant education means.

Let's wish every success for the concert that has no parallel in the world.

1981年全国大会プログラム

第29回 卒業式 (午後1時)

祝賀演奏 箏 六段の調べ } 合奏.....	八橋 検校
松 籟 譜 } 中島 雅楽之都	
卒業生演奏 「ユダス・マクベス」よりの合唱.....	ヘンデル
挨拶.....	大会委員長 本多 正明
挨拶.....	会長 鈴木 鎮一
卒業証書受与.....	会長 鈴木 鎮一
祝 辞.....	理事長 井深 大
卒業演奏 ガボット.....	ゴセック

第27回 全国大会 (午後2時)

箏とバイオリン	1. 春の海.....	宮城 道雄
ピアノ	●二つのメヌエットとジーク.....	バッハ
6才以下の生徒のバイオリン演奏	● a. アレグロ.....	鈴木 鎮一
	b. 無窮動.....	鈴木 鎮一
	c. 習作.....	鈴木 鎮一
セロ	● a. 白鳥.....	サン・サーンス
	b. スケルツォ.....	ペプステル
	c. 楽しき農夫.....	シューマン
弦楽合奏	2. アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク 第1楽章.....	モーツァルト
バイオリン	3. 協奏曲 イ短調 第1楽章.....	バッハ
	4. アレグロ.....	フィオッコ
合奏	● a. ワルツ.....	ブラームス
	b. 浜辺の歌.....	成田 為三
バイオリン	5. 二つのバイオリンの為の協奏曲 第1楽章.....	バッハ
フルート	● a. 「ベニスの謝肉祭」よりアレグレット.....	ジュナン
	b. プーレ.....	ヘンデル
バイオリン	6. 協奏曲 イ短調 第1楽章.....	ビバルディ
	7. プーレ.....	バッハ
	8. 二人のてき弾兵.....	シューマン

鈴木先生のお話と宝くじコンサート

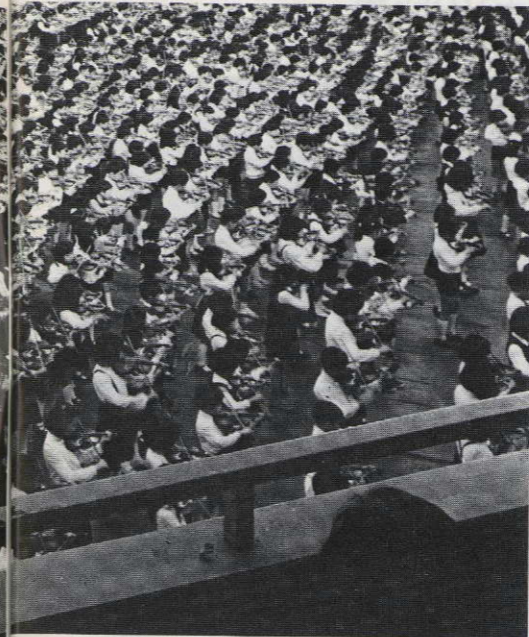
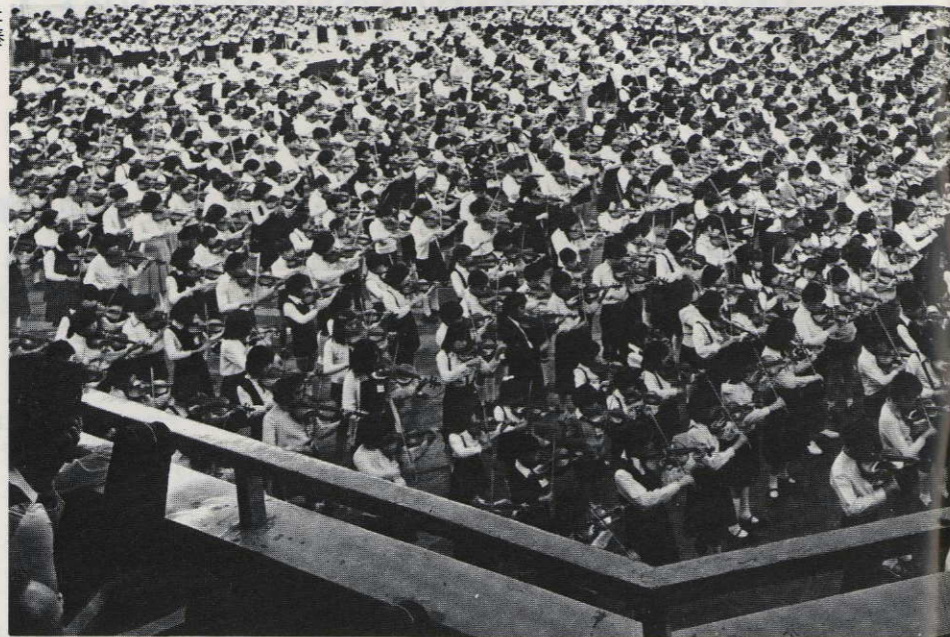
全員で合唱 ●おねがい.....	鈴木 鎮一
------------------	-------

THE 27th NATIONAL CONCERT PROGRAM

P.M. 2:00

KOTO and VIOLIN ●	1. Haru no Umi.....	M. Miyagi
PIANO SOLO ●	Minuet I, II and Gigue.....	Bach
VIOLIN ●	a. Allegro.....	S. Suzuki
(Children under the age of six)	b. Perpetual Motion.....	S. Suzuki
	c. Etude.....	S. Suzuki
CELLO ●	a. The Swan.....	Saint-Saens
	b. Scherzo.....	Wepster
	c. The Happy Farmer.....	Schumann
STRINGS ●	2. Eine Kleine Nachtmusik K.525 1st mvt.....	Mozart
VIOLIN ●	3. Concerto a min. 1st mvt.....	Bach
	4. Allegro.....	Fiocco
VIOLIN, CELLO and PIANO ●	a. Walzer.....	Brahms
	b. Hamabe no Uta.....	T. Narita
VIOLIN ●	5. Concerto d min. for Two Violins 1st mvt.....	Bach
FLUTE ●	a. Allegro from "Carnaval de Venice".....	Genin
	b. Bourrée.....	Händel
VIOLIN ●	6. Concerto a min. 1st mvt.....	Vivaldi
	7. Bourrée.....	Bach
	8. The two Grenadiers.....	Schumann
Speech of Dr. Suzuki and TAKARA-KUZI Concert		
CHORUS ●	Wishing.....	S. Suzuki

広いフロアを完全に埋めつくした
文字通り3000人の大演奏



フルート科生徒の演奏



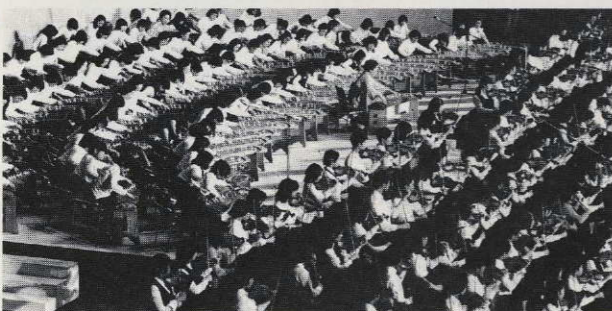
ピアノ独奏バッハのイタリア協奏曲第3楽章

セロ科生徒の演奏



整然たる演奏を近寄ってみれば。

春の海の大演奏



(昨年度大会のアルバム)



300名の生徒によるモーツァルトのアイネ・クライネ・ナハト・ムジーク



卒業証書授与



ご多忙の中をご出席いただいた故大平元首相に
ご説明される鈴木会長

すべての子供達に 鈴木メソッドを!!



大会企画委員長
広瀬八朗

皆様、きょうは才能教育の全国大会によくいらっしゃいました。日本全国より今朝又はお昼に集まってきた3000人の子供達がリハーサルなしで行う演奏は、何時も世界の人々を驚かし続けてきました。以来多くの国々で鈴木メソッドの教育が始まり、そして今もどんどん広がっています。今日始めてここにいらして下さった方々も子供達の演奏をお聴きになっていただければ、何故世界の人達が鈴木メソッドを求めのかがわかり頂けると存じます。

今日のプログラムに「宝くじコンサート」というのがありますが、これはわかりやすく鈴木メソッドを伝えるのに昨秋

から各教室で行う事になりつつあるものです。従ってプログラムにも初めての名前です。

近い内にこの大会も、プログラムを決めなくてコンサートが出来ることになるでしょう。今までに生徒達が習った曲の全部、何十曲も名前が書かれたカードの入った宝くじの箱から、次々にとり出されたカードの曲がその日の大会の演奏曲目となり、それを立派に全員がひきこなすといった事になります。

すでに習った曲を毎日くり返してみがき上げるということで、身についた高い能力が育てられる。これが母国語の教育

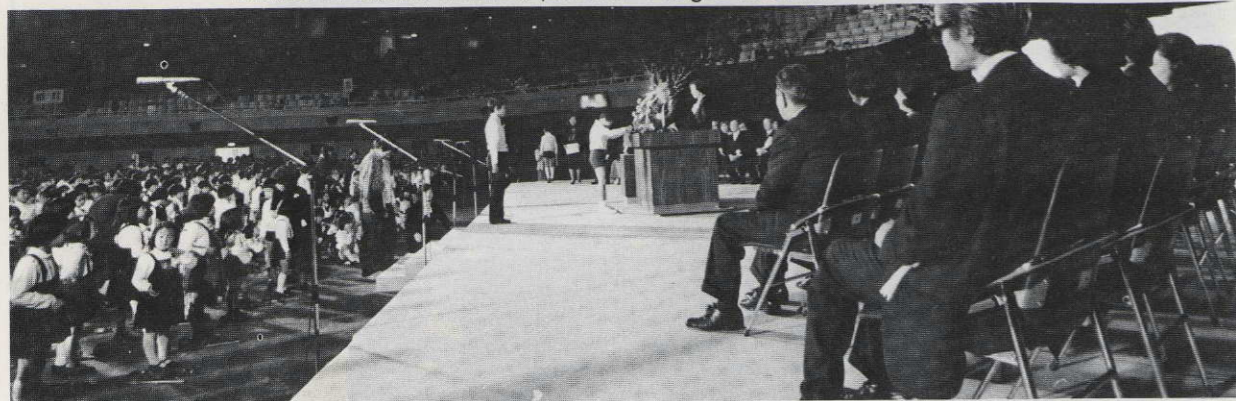
法です。前の曲が立派に弾けるようになると、当然先に進む速さはすばらしく変わってきます。この宝くじコンサートは飛躍を始める能力の「宝庫のかぎ」でもあるわけです。

四十数年前に鈴木先生が母国語の教育法を発見され、また「能力の法則」を作られてから子供達はその法則に従い能力が育つことがはっきりしました。

「どの子も育つ、育て方一つ」で、我々大人は「すべての子供達に鈴木メソッドを」と願わずにはられません。

鈴木メソッド〈母国語の教育法〉の成果

Results of Suzuki Method (Mother Tongue Method of Education)



バイオリン28年間の卒業生数 Number of violin graduates during 28 years

年度	全国大会	卒業式	開催年月日 Date	会場 Hall	合計 Total	初等科前期 1st Step	初等科 2nd Step	中等科 3rd Step	高等科前期 4th Step	高等科 5th Step	研究科 6th Step	研究科2期 7th Step
'53	・	1	27・10・25	東京・共立講堂	196							
'54	・	2	28・10・25	東京・青山学院講堂	363		253			93	17	
'55	1	3	30・3・27	東京体育館	613		458			112	43	
'56	2	4	31・3・30	名古屋市金山体育館	481		342			107	32	
'57	3	5	32・3・31	東京体育館	542		334			159	49	
'58	4	6	33・3・30	東京体育館	449		284			126	39	
'59	5	7	34・3・28	東京体育館	463		277			136	50	
'60	6	8	35・3・27	東京体育館	440		271			107	62	
'61	7	9	36・3・28	東京体育館	496		269			139	88	
'62	8	10	37・3・31	東京体育館	409		234			122	53	
'63	9	11	38・3・30	横浜文化体育館	506		306			126	74	
'64	10	12	39・3・30	名古屋市金山体育館	479		327			115	37	
'65	11	13	40・3・27	東京体育館	571		367			137	67	
'66	12	14	41・3・27	日本武道館	1,364		783	323		180	78	
'67	13	15	42・3・26	日本武道館	926		453	252		148	73	
'68	14	16	43・3・24	日本武道館	865		384	279		139	63	
'69	15	17	44・3・30	日本武道館	910		426	274		142	68	
'70	16	18	45・3・30	東京体育館	1,593	656	474	272		137	54	
'71	17	19	46・4・3	東京体育館	1,755	854	372	318		141	70	
'72	18	20	47・3・26	日本武道館	2,321	1,038	626	350		224	83	
'73	19	21	48・3・26	日本武道館	2,325	1,002	695	340		182	106	
'74	20	22	49・3・24	日本武道館	2,382	954	729	409		204	86	
'75	21	23	50・3・23	日本武道館	2,899	1,230	806	554		192	117	
'76	22	24	51・3・20	日本武道館	3,196	1,294	858	574		289	121	
'77	23	25	52・3・20	日本武道館	3,196	1,326	878	591		297	104	
'78	24	26	53・3・19	日本武道館	3,724	1,459	1,060	709		334	162	
'79	25	27	54・3・18	日本武道館	4,436	1,516	1,138	731	427	389	194	41
'80	26	28	55・3・28	日本武道館	5,056	1,654	1,216	808	735	361	157	125
					計42,896	12,983	10,898	10,506	1,162	4,838	2,120	166

東京体育館(Tokyo Athletic Gymnasium) 日本武道館(Nippon Budo-kan Tokyo.) 横浜(Yokohama City) 名古屋市(Nagoya City)
〔セロ科、フルート科卒業生数は次の機会に掲載します。〕

ピアノ科11年の卒業生 Number of piano graduates during 11 years

Date and year		Place 会場	1st Step	2nd Step	3rd Step	4th Step	5th, 6th, 7th Step			Total 合計		
年	月 日		初等科前期	初等科	中等科	高等科	研究科					
'70	昭45	3/29	東京	63	39	18	12	7			139	
'71	昭46	3/28	松本	152	42	25	13	4			236	
'72	昭47	3/28~4/2	東京・大阪・松本	483	106	49	20	8			666	
'73	昭48	3/30~4/3	松本・東京・大阪	797	185	53	31	43			1,109	
'74	昭49	3/31~4/7	東京・大阪・松本	1,050	297	73	35	12			1,467	
'75	昭50	3/26~3/30	大阪・東京・松本	1,225	460	146	45	24			1,900	
'76	昭51	3/26~3/31	大阪・東京・松本	1,353	543	183	90	23			2,192	
'77	昭52	3/24~3/28	松本・大阪・東京	1,543	648	246	115	40			2,592	
'78	昭53	3/25~3/30	松本・神戸・東京・名古屋	1,902	759	261	122	49			3,093	
'79	昭54	3/25~3/30	松本・神戸・東京・名古屋	1,892	792	336	118	114			3,252	
'80	昭55	3/23~4/1	松本・豊中・東京・名古屋	2,105	945	386	199	1期 78	2期 66	3期 13	481人	3,792
				12,565人	4,816人	1,776人	800人				20,438人	

●東京(Tokyo) 大阪(Osaka) 松本(Matsumoto City) 名古屋(Nagoya City)
(会場名)東京 主婦の友本社講堂(昭45)、日仏会館(昭46)、虎の門ホール(昭47)、サンプラザホール(昭48~55)
松本 才能教育会館(昭46~55)
大阪 御堂会館津村別院(昭47)、大阪厚生年金会館(昭48~50)、大阪府青少年会館(昭48~55) (昭51、52)
神戸文化ホール(昭53、54)、豊中市市民会館(昭55)
名古屋 名古屋市民会館中ホール(昭53、55)、愛知県中小企業センター(昭54)

質(卒業課題曲の内容)と量(卒業生数)の兼備をごらんください

The relation between quality and quantity of graduates

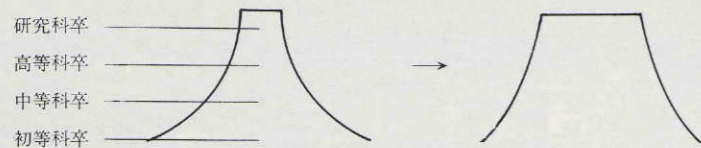
卒業課題曲 (Graduation pieces)

Violin	初等科前期卒業 First Step	初等科卒業 Second Step	中等科卒業 Third Step	高等科前期卒業 Fourth Step	高等科卒業 Fifth Step	研究科卒業 Sixth Step	研究科第2期卒業 Seventh Step
作曲者 Composer	ゴセック Gossec	バッハ Bach	ビバルディ Vivaldi	コレルリ Corelli	バッハ Bach	モーツァルト Mozart	モーツァルト のロンド5分 57秒とパラ ディスのシ ンシリアー ノ3分15 秒
曲名 Piece	ガボット Gavotte	ブーレ Bourree	協奏曲ト短調1楽章 Concerto in G Minor 1st mvt.	ラ・フォリア La Folia	協奏曲イ短調 Concerto No.1	協奏曲第4番 Concerto No.4	Mozart Ron- do 5' 37" and Paradis Sici- lienne 3' 15"
鈴木鎮一指導曲集 Suzuki Text Book	1巻 Vol. 1	3巻 Vol. 3	5巻 Vol. 5	6巻 Vol. 6	7巻 Vol. 7	10巻 Vol. 10	
演奏時間 Time	2分23秒 2' 23"	3分46秒 3' 46"	4分31秒 4' 31"	7分22秒 7' 22"	15分18秒 15' 18"	22分50秒 22' 50"	

Piano	初等科前期卒業 First Step	初等科卒業 Second Step	中等科卒業 Third Step	高等科卒業 Fourth Step	研究科第一期卒業 Fifth Step	研究科第二期卒業 Sixth Step	研究科第三期卒業 Seventh Step
作曲者 Composer	バッハ Bach	バッハ Bach	モーツァルト Mozart	バッハ Bach	モーツァルト Mozart	バッハ Bach	ベートーベン Beethoven
曲名 Piece	メヌエット2番 Minuet No.2	二つのメヌエットとジグ Minuet I, II and Gigue from Partita	ソナタ K. 331 Sonata K.V. 331	イタリア協奏曲 Concerto Italien	協奏曲戴冠式 Concerto "Coronation"	パルティータ1番 Partita in Bb	ソナタ熱情 Sonata "Appassionato"
鈴木鎮一指導曲集 Suzuki Text Book	2巻 Vol. 2	4巻 Vol. 4	7巻 Vol. 7				
演奏時間 Time	1分50秒 1' 50"	5分36秒 5' 36"	17分05秒 17' 05"	12分20秒 12' 20"	31分19秒 31' 19"	17分05秒 17' 05"	31分28秒 31' 28"

卒業における今後の課題 鈴木先生の要望

富士山型(ピラミッド型)から高原型(円柱型)へ



卒業生数をご覧ください。例えばバイオリンでは、初等科前期のゴセックのガボットの卒業生は12,983人で、研究科のモーツァルトの4番の卒業生は2,120人です。麓と山頂の比は約6分の1で完全な富士山型です。これを当然と考えないのが鈴木メソッドであり、世界に波及する推進力です。

卒業制度の解説

この卒業制度は、春の全国大会、引続き松本・東京・大阪名古屋で行われるピアノ科卒業式、初夏に開催の指導者研究大会と海外での国際鈴木メソッド研究大会、夏の松本夏期学校、秋の海外派遣生徒ツアーに続く、本会の最も重要な行事です。

秋がふかまり空の青さが増してくると、卒業テープ吹込の季節到来です。指導者の先生方の大きな仕事が始まります。札幌から熊本まで日本中の教室で一斉に行われるのです。

〔卒業テープの吹込〕

鈴木メソッド指導曲集でバイオリン・ピアノ・セロ・フルートの各科を習っている子供で卒業課題曲を習い終ったものは、年齢に関係なくその曲をテープに吹込んで、鈴木先生の許に提出しなければなりません。

〔卒業テープ提出の目的〕

子供達の「意欲づくり」これにつきます。ですから、提出のテープに点数をつけ、順位をつけ、合否をきめ、悪いものは叱るなどという一般のテスト風景は全くありません。これは又子供達の意欲づくりであるとともに、親と指導者の意欲づくりでもあるのです。見事な仕組です。

〔卒業テープをさく鈴木先生〕

毎朝3時から9時までの時間がこれにあてられ、もう20年以上もこの至難な業をほほえみともしりくんでこられました。聞き終って返送されるテープにはこれからの学習のポイントが吹込まれています。

この数年、テープの提出本数は8,000本をこえ、今年(昭和56年度)は10,000本に達したときいております。鈴木先生のお姿を想像しますとき、ふかい厳しゅうな気持ちになります。

〔卒業テープ吹込の風景〕

鈴木先生にきて頂くとという言葉には、不思議な魅力がひそんでいます。演奏する子供、祈るような母親、緊張のためにぐっと力のはいる先生。白熱の瞬間です。鋼の焼入れと同じです。

テープの吹込と提出は、独奏に次ぐ練習と緊張が必要です。この素晴らしい学習のチャンスを、本会の子供達全員が数年に一度は必ず与えられているのです。

〔卒業テープの集計〕

鈴木先生の頭の中には、現在の日本国内の2万人のバイオリン・ピアノ・セロ・フルートの子供達一人一人の演奏が、手にとるように生き生きとおさめられています。

この膨大かつ詳細な演奏データが年毎に整理され、国内及び海外での鈴木メソッド研究大会のテーマとなり実技の講習となるわけです。「どの子も育つ」という子供達の能力の可能性と、「育て方一つ」というその方法が、このようにして鈴木先生の手によって追求されているわけです。

〔全国大会演奏の秘密の力〕

出演生徒3,000人という超大コンサートです。全員のリハーサルはまず不可能です。それにもかかわらず、子供達の生命の輝くような感動的なしかも整然とした演奏ができるのは、この本会の独自の卒業制度が、子供達の学習の「意欲づくり」に成功したためだと思います。

Graduation System

The Graduation is one of the most important events along with the National Concert in spring, the graduation ceremonies for piano students in Matsumoto, Tokyo Osaka and Nagoya, the early-summer meeting of leaders, The International Suzuki Teachers Conference, the summer school in Matsumoto and the overseas concert tour in autumn. When the autumn deepens and you have cloudless blue skies above its the season of recording graduation tapes. An important and great task awaits the leaders. This takes place in all classes across the country, from Sapporo to Kumamoto. **〔Recording of graduation tapes〕**

Regardless of their age, all students, who are taking lessons of violin, piano, cello or the frute on the Suzuki Text Book and have finished graduation pieces, are required to send in recorded tapes of those pieces for Dr. Suzuki's comment.

〔Purpose of submitting graduation tapes〕

The purpose is solely to "motivate students." Therefore, the sent in tapes are not given marks, nor ranked or rated as good and bad as in normal tests. It is not for finding faults with students. It is to motivate students and at the same time to motivate their parents and teachers.

〔Dr. Suzuki listening to graduation tapes〕

Dr. Suzuki makes it a rule to listen to these tapes from 3 to 9 o'clock every morning and he has continued this difficult task for more than 20 years with a smile. The tapes are returned with his advice being recorded. The number of tapes exceed 8,000 per year and this year (1981). It is said to have reached 9,000. We cannot but be struck with his sincerity when we think of Dr. Suzuki listening to these tapes one by one.

〔Recording scenes〕

There is really a magic in the word that one's tape is listened by Dr. Suzuki. The child trying to Concentrate on the performance, the mother crossing her fingers and the teacher becoming tense in spite of himself, it's a moment of concentration, like the hardening of steel.

This recording is demanding second to none except a recital in terms of practice and tension required.

This valuable chance is given to every student once a year.

〔All Tape Data Memorized by Dr. Suzuki.〕

Recorded play of each of 20,000 Suzuki children in Japan is carefully listened to by Dr. Suzuki and is stored in his vast memory, be it either violin, piano, cello or flute.

The huge data on students' performance are assorted annually and made available for discussion at study meetings in Japan and abroad. The concert that "every child can be made to grow with the proper method of education" is thus pursued by him in practice.

〔Magic in National Concert〕

The National Concert is a super-jumbo concert performed by about 3,000 children. The number of participants makes a rehearsal impossible. Still, they play in concert magnificently. This fact shows how the graduation system succeeded in "motivating" children.

鈴木メソッドの原点・母国語の教育法

私たちは、くりかえし又くりかえし、この原点にもどり、鈴木先生の言葉への真の理解をふかめていくことが必要と思います。

◇これは以前の「才能教育誌」昭和32年4月号と5月号に掲載された鈴木先生の記事にもとずいて作りました。古くてしかも常に最も新しいとはこの事だと思います。

●どの子ども必ず育つ、という信念の中で行われている。

この信念があるために、親達は、あせることも怒ることもなく、大きな愛情と自信の中で、子供達に母国語の能力を育てていくのである。

これは人間の智識ではなく叡知である。

●生れたその日から、教育は始まっている。

能力育成の原則の一つ「より早い時期」ということが、母国語では確実に守られ行われている。

苗を育てそこねた稲は、立派に育たないことを誰もよく知っているが、わが子という大切な苗に無関心な人が多いのは悲しいことである。

●教師である親達は、皆母国語の達人である。

より優れた指導者は、より優れた能力を育てていく。教師の能力が低くは、子供が高く育つはずはない。之は原則である。

●直感に訴えて育てる。

人間に与えられている最高の能力〈感覚〉に直結して母国語の教育が行われていく。母親の笑顔とともに言葉が与えられる代りに、もし最初に文字が与えられて母国語の教育が始められたとすれば、どの子どもスラスラしゃべることが不可能になるのではないだろうか。

●予習や復習を強いられることが全くない。

「勉強しなさい」と言われて母国語を練習した経験をもつ子供は、おそらく世界中で一人もいないことだろう。

●親(教師)は子供(生徒)に向かって、母国語がうまくなれないということで、腹をたてたり叱ったりすることは一度もない。

したがって、すべての子供達はすこしも劣等感を覚えずにすくすくと伸び育っていく。母国語の世界は、唯一の教育天国ではあるまいか。

●子供同志で互いに力を育てあう。

友達ができるようになると、毎日楽しく母国語の実習が行われる。母国語の上級生が中に交って訓練してくれる。覚えた言葉が足りない子供達に、不自由さを知らせ、もっと多くの言葉の必要性を感じさせる。

母国語教育のすばらしさは、子供に向上心をつくり、決して競争心をつくらない。

●毎日休むことなく、多くの反復訓練が行われて、能力飛躍の基礎がつけられていく。

母国語の訓練は、この点実によく条件が守られていて、毎日休まず反復訓練が行われている。このために総ての子供が育っていくのである。

人間の能力は、訓練のあるところへ、善悪美醜、優劣の区別なくその訓練のまゝに育っていくのである。

●何故、毎日の休みない反復訓練が必要なのか。

人間の生命力は、身体につけられたすべての傷を自然治癒していく力をもっている。だから記憶にも、これを消し去る忘却作用が絶えず働いているわけである。

どのような繰り返しが必要なのか、母国語の教育はそれを教えてくれる。

●やがてすべての子供に、能力の飛躍が始まる。

一歳前後に始めてウマウマの一語を獲得した幼児が、三、四歳頃になると自由自在な会話が可能になっている。わずかな数年で驚くべき能力の飛躍である。

能力の飛躍の始まらない教育は、失敗である。

●好きも、嫌いも感じさせない。

日本人に英語はすきかきらいか聞けば、返事はすぐかえってくる。では日本語はすきかきらいかと問われれば、皆返事に困るだろう。

最高の教育は、すきもきらいも感じさせないまゝ、学ぶ者を知らぬ間に高くへ導き育てる。これが母国語の教育の姿である。

●生まれつきの優劣を誰も問題にしない

人間のすべての能力(文化的)の中で、生まれつきが全く問題にされないのは、母国語の能力だけであろう。

しかし母国語と雖も、教えなければ絶対に育たないことは自明の理である。

●教材がいつも完全消化されて、むづかしいと感じさせない。

落伍させない教育の最重要ポイントである。

最初にウマウマに当る易しい教材を正しく丁寧に教える。何とか出来るという段階にまず育てる。次に出来てからの訓練こそ教育の生命である。次第に立派にできるようになる。そしてその教材の完成は、当人がやさしいと感じるようになった時である。

●母国語の教育に教科書は不要

生まれた時から母親は心からの笑顔でわが子に話かける。教科書片手に赤ん坊に母国語を教えている母親の姿を見たことのある人は、まだ誰一人いないだろう。

これは無くても幸い、もしあれば一番閉口するのは赤ん坊であろう。

●テストも入試も学期も学年もない

結局なにもなくても、子供達はいきいきと伸び育つ。学校教育はテストと入試の連続で子供達をせめかてる。その結果、学習への意欲よりも劣等感を養い、優秀生はすくなく落伍者が激増する。

◎母国語は別だ、他の教育と一緒に考えるのはおかしいという方のために。

今、皆さまの眼前に展開している3,000人の子供達によるキラキラと輝くような大合奏も、夢まぼろしということになりましょう。

THE PRINCIPLE OF SUZUKI'S MOTHER TONGUE METHOD

We have to return to this principle again and again, and try to realize Dr. Suzuki's philosophy ever more deeply.

This article is based on Dr. Suzuki's writings in the monthly publication of Talent Education, issued in April and May, 1957. His teaching seems to have an ever new meaning.

'Every child is sure to grow' is the the belief of parents.

Because of this belief, parents can with confidence and infinite affectinn help their children learn their mother tongue and develop their ability without worrying or fretting about it. This is not an acquired knowledge, but a wisdom inherent in the human being.

Education beings on the very day a child is born.

'At an earlier date' is one of the principles of talent education, and it is certainly observed in the process of mother tongue learning.

One knows well that rice will never give a good crop if one fails to breed a good young plant, but it is a pity that there are many who do not pay enough attention to bringing up their own dear children, while they are still young.

Parents, who are teacher of a mother tongue to their children, are all experts in that language.

The better teacher brings out better ability from his pupils. If the teacher's ability is low, that of his pupils may not be expected to grow up fully. It is an undeniable fact.

'Intuition' is important in talent education.

Learning of a mother tongue is conducted in close conection with 'intuition', the highest faculty inherent in the human being.

If the first word of a mother tongue be given to a child, not together with his mothers loving smile but with hard written letters, will the child be able to learn to speak his own language?

Never force children to practice or rehearse.

There may be nobody in the world who has been forced to learn his mother tongue, ordered by someone to 'study hard'.

No parents (teachers) ever get angry with or scold the children (pupils) because they are not able to speak their mother tongue fluently.

Therefore, children can easily and without hindrance develop their own ability of language, having no inferiority complex at all. Is it not an ideal state of education?

Children develop their own ability for themselves.

When children learn to speak, they enjoy speaking and practice it everyday among themselves. Elder children often join younger ones and make them conscious of the necessity of learning more and help them get more. In this way the children develop their own ability of language for themselves. This is a wonderful way of learning. The spirit of self-betterment and collaboration prevails among them.

Repeat practice and rehearsal everyday, and the basis is prepared for a great leap forward in talent.

Learning of a mother tongue is made exactly in this way. It is why every child can learn and become an expert in his mother tongue.

Human faculty develops by exercise, only by exercise, regardless of its inborn differences.

Why is it necessary to practice everyday?

Life force has the power of healing any wound inflicted on a human body. Human memory is also being obliterated everyday by the similar process.

The necessity of repeated practice is what the learning of a mother tongue tells us.

Every child shows a great leap forward before long.

An infant, who has learned to utter a word or two when one year old, rapidly develops his ability and, when he is three or four years old, becomes able to command the language freely. This is a wonderful progress in so short a time.

Education, which does not bring about such a leap forward, is a failure.

'Likes or dislikes' is out of the question.

If you ask a Japanese whether he likes English or not, you will get an answer easily. But if you ask him whether he likes Japanese, he will find himself at a loss for an answer. In this case whether one likes it or not is out of the question.

Education, if it is a good one, makes you develop your own faculty to a high degree, while you are unconscious of it.

Disregard the difference in inborn abilities.

Of all the cultural faculties a human being is born with, that of learning his mother tongue may be the only one that we can disregard the difference in. Anybody can learn his mother tongue, but it is evident that someone must teach and help him learn it.

Teaching-matter needs to be mastered thoroughly, and felt by the children not too difficult.

This is the most important point to prevent the pupils from dropping out. At first we teach them an easy, introductory part carefully and bring them to play it anyway, and then make them practice it again and again. And not until they have learned it thoroughly, been able to perform it beautifully, and begin to feel it easy, do we move to the next step.

No textbook is necessary for teaching of a mother tongue.

A mother always speak to her baby, with a loving smile on her face. She has been doing so since the very day it was born. Has anybody ever seen a mother teaching her baby to speak their own language with a textbook in hand?

There is no need for any test, entrance exam, terms or school-years.

Nothing involved with the school system is necessary for children to grow up lively and vigorously.

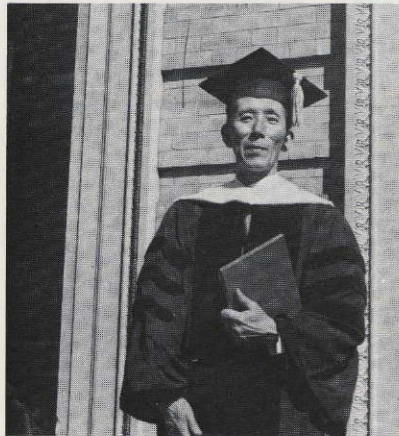
The present school system always drives children by tests and exams. As a result they develop not a test for study but an inferiority complex. A few succeed but many drop out.

For those who think that learning of a mother tongue is one, and that of other subjects is another.

If you think so, you would also have to think of the scene as imaginary -- the wonderful scene before you in which 3,000 children are brilliantly playing the violin in concert.

世界における 鈴木会長の評価

- ◇1951年(昭26) 53歳
中日文化賞を受ける。名古屋市中部日本新聞社
- ◇1961年(昭36) 63歳
信濃毎日新聞社文化賞を受ける。長野市
- ◇1966年(昭41) 68歳
ニューイングランド大学より名誉音楽博士号を贈られる。
アメリカ



名誉音楽博士の称号をお受けになった鈴木先生

- ◇1967年(昭42) 69歳
ルイスビル大学より名誉音楽博士号を贈られる。アメリカ
- ◇1969(昭44) 71歳
ユージン・イザイ財団よりイザイ賞を受ける。東京・ベルギー大使館
- ◇1970年(昭45) 72歳
勲三等瑞宝章を受ける。日本
- ◇1972年(昭47) 74歳
ロチェスター大学より名誉音楽博士号を贈られる。アメリカ
- ◇1973年(昭48) 75歳
フィラデルフィアの人間能力開発世界大会で人間能力開発機構スペクトラ賞を受ける。アメリカ
- ◇1976年(昭51) 78歳
第6回モービル音楽賞を受ける。東京
- ◇1978年(昭53) 80歳
アトランタ市名誉市民に推薦される。アメリカ
- ◇1979年(昭54) 81歳
松本市名誉市民に推薦される。

ロチェスター大学の名誉音楽博士号

ニューヨークのロチェスター大学50周年記念事業の一つとして、附属のイーストマン音楽学校(ジュリアード、カーチスと共にアメリカの三大音楽学校)において2月12日に授与式が行われ、鈴木会長の「能力の法則」の講演と、スズキ・メソッドで育ったアメリカの26名の子供達の演奏が披露され、参列者にふかい感銘を与えました。

この子供達は、6年前にニューヨーク州議会から年額2万ドルの予算で作られたProject Supperというスズキ・メソ-



ユージン・イザイ財団よりイザイ賞を授与される

ドの研究団体に所属しており、この Supper の名はスズキの Su.、町名のペンフィールドの p.、イーストマンの e.、ロチェスターの r を取って名づけられています。

●尚、特筆すべきことは、この鈴木会長への名誉博士号の授与は、今世紀の大作曲家イゴール・ストラビンスキーに次いで二人目だということであり、その価値の高さは私どもの想像に余るものがあります。

アトランタ市名誉市民

1978年4月13日夜、ジョージア州アトランタ市のシンフォニーホールで日・米200人の鈴木メソッドの子供達の親善コンサートが催されましたが、そのステージでアトランタ市長と日本の領事立合いのもとに、鈴木会長をアトランタ市三人目の名誉市民に推薦する儀式があり、更にこの日をアトランタの「鈴木の日」に決定したという市長の宣言がホール全員起立の中で行われました。

オーストラリア教育界の評価

シドニーでもメルボルンでも、鈴木メソッドのレッスンといえば公然と学校の先生の許可を得ることができるのです。「朝からでもバイオリンやピアノのレッスンができるので、日本と違ってとても助かります。」とは、鈴木メソッドの先生方の言葉です。

日本とは全く別世界のような事実です。
◇ワシントン大学では、モンテッソーリなど世界的な教育学者の大きな写真の並んでいる一番最後に、鈴木会長の写真がかかげてあるそうです。

1980年のスポット

白熱してきたオーストラリア

シドニー

10月12日夜、世界的に有名なオペラハウスの大ホールで、鈴木会長夫妻が出席して第2回卒業コンサートが行われました。2700の座席は超満員、ホールの響きも素晴らしく、正しく育てられた数百名の子供達の見事な演奏に、客席の喜びと感激は最高にたかまりました。

メルボルン

第2回卒業コンサートが、17日午後グラス・ブルックスホールで行われました。

●オーストラリアでは、昨年と同じ卒業制度が実施され、鈴木会長が山の絵をかいた卒業証書の色紙の上に、英語版の卒業証が記されています。

テレビも新聞もこの卒業コンサートを大きくとりあげましたので、鈴木メソッドの運動は一層大きく広がっていくことでしょう。

特筆すべきは、オーストラリア教育界の反応です。スズキのレッスンと言えば学校の先生も、「しっかりやっつけてきなさい」というわけで、例え朝からでも公然と授業を休む許可が得られるのです。日本ではとても考えられない理解の深さと拡がりです。



オーストラリアのサマースクール

ロンドンでは、ヨーロッパ7ヶ国合同のスズキ・メソッド研究大会が開催されました。

8月8日午後、ロンドン空港ロビーで英国の生徒30名がキラキラ星を演奏し、鈴木会長夫妻の英国到着を歓迎いたしました。英国、アイルランド、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダ、デンマーク7ヶ国の、すでに本会に留学した鈴木ティチャー達を中心に、その生徒と父兄の700余名が出席し、鈴木会長の講演、グルーブレッスン、コンサートと盛大なヨーロッパ大会でした。

各国とも、「親の正しい理解をつくることの難しさ」が一番の問題でした。鈴木会長は、「どの国でも常識を改めるためには、たっぷりした努力と、たっぷりした時間が必要です。皆さん努力いたしましょう」と、申し合せを行いました。

ロンドンでも、BBCテレビや数々の新聞のインタビューなどで、鈴木メソッドは新しい教育の革命として全英に報導されました。

——指導者の海外派遣活動——

〈バイオリン科〉

宮沢 進先生 シドニー、メルボルン(オーストラリア)1月12日~1月31日

森ゆう子先生 サンフランシスコ(アメリカ)3月21日~4月20日

広瀬八朗先生 ケバラ(フィンランド)6月2日~15日

〈ピアノ科〉



スズキ・メソッド元フィンランド駐日大使と(ケバラ市)

秋葉三佐子先生 シドニー、メルボルン(オーストラリア)1月12日~1月21日

片岡 治子先生 ロンドン(英国)、オペリン、ステイブンスポイント、サンフランシスコ、メンフィス(アメリカ)7月10日~8月12日

〈フルート科〉

高橋 利夫先生 サンフランシスコ、ステイブンスポイント(アメリカ)8月1日~26日

宮沢・秋葉両先生のオーストラリアでは、まず4日間のティチャー・トレーニング・コースがあり、全土からバイオリン・ピアノ夫だ40名の先生方が出席、続くサマースクールではシドニー会場で400名余りの生徒が参加し、その指導講師になられたわけです。

森先生のサンフランシスコでの1ヶ月は大変なハード・スケジュールでした。第一週目はドミニカン・カレッジの鈴木プログラム所属の子供達の個人レッスン。第二週目はアメリカ各地から集ってこられた50人程の先生達へのワークショップ。第3週目からは、シスコ近郊の8ヶ所の教室をまわってのグルーブレッスンでした。

広瀬先生のフィンランド行は2回目。昨年の講習会のテレビ録画が、何とクリスマス番組として12月20日と25日に全土に放映され、一躍、鈴木メソッドは有名になりました。

今年は先生と5名の生徒が招待され、主催は才能教育を行っているケバラ音楽学校で、市も予算的後援をし、文部省は航空券を支払ったそうです。

片岡先生が初めてアメリカにスズキ・メソッドのピアノ指導法を伝えて早くも8年目、この間アメリカ、カナダ、オーストラリア、昨年のミュンヘン研究大会からヨーロッパと拡がり、大勢の先生方と子供達が喜んでピアノ勉強に励むようになりました。今年は先生に4歳、6歳、11歳、14歳の4人の生徒が同行いたしました。

オペリン大学の研究会では昨年にくらべて先生の数がずっと増え、カナダ、チリ、メキシコ、アメリカもニューヨークやアイダホ等の遠くから集り、70人以上にもなったとのこと。今後の発展が楽しみです。

高橋先生は、サンフランシスコ大学に1週間、ステイブンスポイントのビスコンシン大学に2週間出席されました。現在アメリカン・スズキ・フルート所属のメンバーは150人に達し、僅か数年の間に急増したわけです。先生は来年、デトロイトでの国際フルート連盟の大会にマスター・コースの招聘講師として出席されます。

最近の才能教育活動は海外でばかり行われ、国内での活動がお留守ではないか、との声の一部があがっております。

その通りです。鈴木会長の各地における講演会のみで、国内における私達の新天地開拓の活動は完全に影をひそめております。

一方、この声をあげる人達も、自分の腰をあげることは無関心です。万事、会長一人に頼りきって安心している私たちです。声はここにあげていただきたいと思っております。

大学オーケストラのコンサート・マスター

続々誕生

東京品川支部の宮沢進先生の教室は、大学卒業までレッスンを続ける生徒の多いことで有名です。東大、早稲田、慶応、教育大、都立大、外語大、聖心、青山、学習院、芸大、桐朋等、まことに多彩です。

ところが、更に素晴らしい事実があります。これらの大学には夫々立派なオーケストラがあり、そのコンサート・マスターが宮沢教室から続々誕生しているのです。この数年の間に、早稲田、学習院、外語大、聖心、青山、慶応医学部のオケが挙げられます。

コンサート・マスターは多数の楽員のリーダーであり、優秀な技術とともに人柄が重視されますので、きわめて撰ばれたポジションと言えます。一教室でこんなに多数のコンサート・マスターを出すことは珍らしく、何とも見事な教育の成果です。

それでは他の教室からはどうなのかと一寸きいてみました。青山学院などは、現在の4人の先生方が、かつてのコンサート・マスターであることがわかりました。

また、今大会の仕事を手伝ってもらっています粕谷ひとみさん〈長野市伝田教室出身〉は、現在桐朋音大大学院生でかつて同大オケのコンサート・マスターでした。



(写真をご覧下さい) 学習院大学オケの1979年10月のベートーベン第9番「合唱」の演奏風景ですが、本日の大会に御来席を賜っております、浩宮さまのピオラをお弾きになるお姿が、指揮者の右側前列先頭の二列目に拝見されます。この時のコンサート・マスターは宮沢教室出身の大野玲子さんです。その前任者が青木洋子さん〈松本市森教室出身で現指導者〉でした。

なお、詳しく調べれば一体どれ程の数になることでしょうか。

◇コンサート・マスターとは、指揮者の左隣り最前列の先頭でバイオリンをひいている人です。